

重要な構成要素（建造物）

ぎ ふ じょう ふっ こう てん し ゅ

岐阜城復興天守



❖ 岐阜城復興天守の概要 ❖

岐阜城復興天守の歴史は古く、初代の復興天守は明治43(1910)年の建築で、日本で初めて建設されたと考えられています。建築場所は古地図に



復興天守が建築される前の天守台と記載のあった箇所(明治時代の絵葉書 岐阜市歴史博物館所蔵)所で、建物は木造トタン葺きの3層、内部は写真等の記録はないですが、吹き抜けになっており、ハリボテ状の構造であったといわれています。建築の際、見学ルートとなる登山道の改修も検討されたようです。



初代の復興天守の絵葉書（岐阜市歴史博物館所蔵）

その後、初代は昭和18(1943)年に焼失します。その衝撃は市民にとって大きなもので、直後から再建の動きがみられます。社会情勢もありこの時の再建はなりませんでした。戦後復興のシンボルとしての意義をもち、昭和31(1956)年に鉄筋コンクリート造りの3層4階として、二代目が再建され現在に至ります。

❖ 岐阜城復興天守と人々の関わり ❖

当時の人々の復興天守にかける思いは強く、初代の復興天守の建築の際、二代目の再建の際には、市民からの寄付や岐阜城再建期成同盟会による募金があり、建設されるに至っています。

平成9(1997)年に行われた、瓦の葺き替えや外壁の修理などの平成の大改修にあたっては、瓦を山上に運ぶ市民参加型のイベントも開催され、多くの市民が参加しました。



瓦を背負う参加者（吉田尚弘氏提供）

また、初代が建設されて以降、大正から昭和初期にかけて、岐阜の町家では新築や増築、改築等により、2階に本座敷を置く事例が目立ちます。この2階座敷は家によって表、奥、離れと置かれる位置は異なりますが、共通した特性として、座敷からの眺望がほぼ決まって、金華山、復興天守が望めるようになっています。これらから、復興天守が当時の岐阜市民にとって、大きな誇りとなっていたことが分かります。



平成の大改修（吉田尚弘氏提供）

このように岐阜城復興天守は、郷土の英雄を偲ぶもの、戦後復興のシンボルとしてなど、金華山と共に岐阜市のランドマークとして、市民をはじめ多くの人々に親しまれています。その場所が変わらずあること、見上げればいつも見えることなど、心象風景としての意味合いが強く根付いており、今ではなくてはならないものになっています。

この復興天守のある金華山は、「岐阜城跡」として平成23(2011)年に国の史跡に指定されている他、平成27(2015)年に第1号として認定された日本遺産「信長公のおもてなしが息づく戦国城下町・岐阜」の構成要素にもなっています。

この復興天守のある金華山は、「岐阜城跡」として平成23(2011)年に国の史跡に指定されている他、平成27(2015)年に第1号として認定された日本遺産「信長公のおもてなしが息づく戦国城下町・岐阜」の構成要素にもなっています。



観光情報はこちら

【問い合わせ先】

・岐阜城

☎058-263-4853

・観光コンベンション課

☎058-265-3984

長良川と町を巡る

1 長良川の鵜飼



現在は6名の鵜匠が行っています。

2 鵜匠家



鵜匠が鵜と共に暮らし、そのために必要な施設があります。

3 川原町（川原町屋）



川の中にある集落で、白木の格子が続いています。

4 岐阜公園三重塔



旧長良橋の古材を利用しています。

所用時間 約2時間 / 約4 km

岐阜市の重要文化的景観の概要

選定日

平成 26 年 3 月 18 日

選定地域

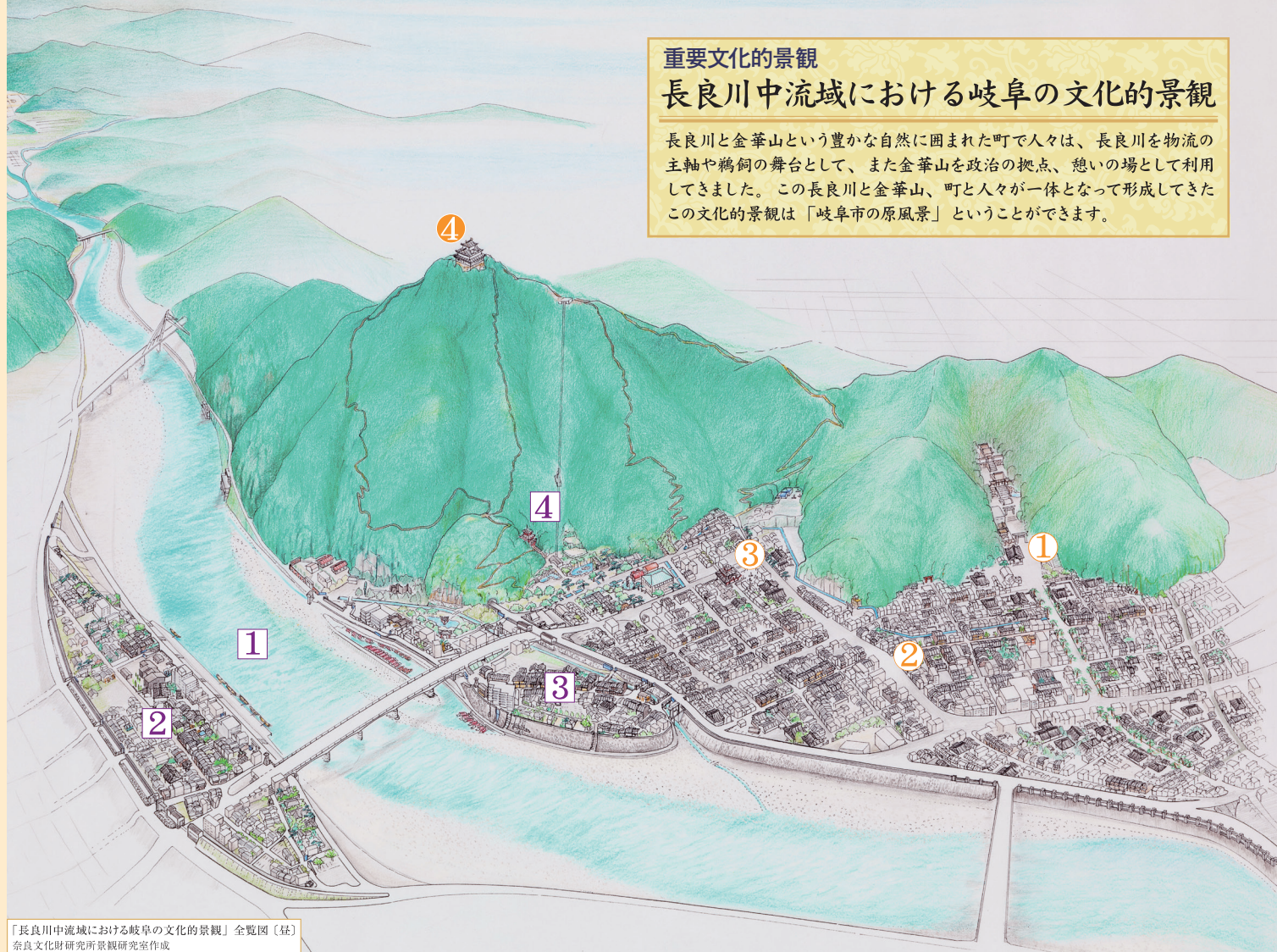
ながらがわ きんかざん
長良川地区、金華山地区、
うかいや かわらまち
鵜飼屋地区、川原町地区、
きゅうじょうかまち
旧城下町地区（331.9ha）

現：岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課 〒500-8701 岐阜市司町40-1 TEL 058-214-7157

重要文化的景観

長良川中流域における岐阜の文化的景観

長良川と金華山という豊かな自然に囲まれた町で人々は、長良川を物流の主軸や鵜飼の舞台として、また金華山を政治の拠点、憩いの場として利用してきました。この長良川と金華山、町と人々が一体となって形成してきたこの文化的景観は「岐阜市の原風景」ということができます。



「長良川中流域における岐阜の文化的景観」全図（註）
奈良文化財研究所景観研究室作成

金華山と町を巡る

1 伊奈波神社界限



岐阜市の総産土神である伊奈波神社などの寺院が多く集まっています。

2 御館街道（空堀屋）



鵜飼で捕れた鮎を塩漬けにし、この道を通り江戸まで運んだことに由来します。

3 正法寺大仏殿（岐阜大仏）



黄檗宗の寺院で、籠大仏と呼ばれる本尊があります。

4 岐阜城復興天守

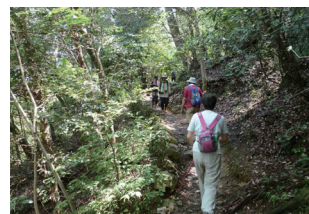


現在は、昭和31年（1956）年に造られた2代目の復興天守です。

所用時間 約2時間 / 約3 km
（ロープウェイ使用）

金華山と人々

金華山は、戦国時代には斎藤道三公や織田信長公の居城として機能していました。近世になると絵画などで、鵜飼の背景として金華山が描かれる構図が見られるようになります。現在は、毎日多くの人々が山に登り、山頂からの眺望を楽しみ、町の人々は、生活の中で金華山を見上げ、常に山を意識して暮らしています。



人々の暮らし

旧城下町は商業により発展し、材木や紙の間屋業や手工業が発生しました。金華山に岐阜城復興天守が造られると、大事な客人をそこでもなし自らも楽しむために、城が見える位置に本座敷や茶室を置くようになります。また地域の人々は、通りに面した家屋の木部を年に数回水や湯で洗います。この習慣により、白木の格子の町並みという独特の景観は維持されています。

